

高知大学人文社会科学部人文社会科学科人文科学コース  
『人文科学研究』第23号 別刷(二〇二八)

日清戦争と高知県  
——戦没者の問題を中心に——

小  
幡

尚



# 日清戦争と高知県 ―戦没者の問題を中心に―

## The Sino-Japanese War and Kochi Prefecture : Mainly Focusing on the Commemoration of the War Dead

小 幡 尚

Hisashi OBATA

### はじめに

本稿の課題は、日清戦争が高知県の地域社会に与えた影響について、戦没者とその慰霊の問題を中心に基礎的な史実を明らかにし、その意義について考えることである。

筆者はこれまで、高知県における戦没者慰霊の歴史について研究を続けてきた。<sup>①</sup>とくに、「戦没者（戦争で死亡した「兵士」、戦死者・戦病死者・戦傷死者を合わせた者）」の葬儀がどのように行なわれ、どのような墓に葬られたのか」という疑問を解明しようとしてきた。

まず、筆者がこれまで明らかにしてきたことのうち、本稿が扱う戦争の「次」の戦争である日露戦争の戦没者慰霊をめぐる事象について述べておきたい。<sup>②</sup>

高知県の郷土部隊たる歩兵第四四連隊は、一八九六年一月に松山兵営で編制され、翌九七年七月に土佐郡朝倉村（現高知市朝倉）の兵営に入った。高知県に初めて「軍隊」が置かれたのは、日清戦争後のことなのである。

四四連隊は、日露戦争に出動し、多くの犠牲者を出した。同戦争における連隊の戦没者は二二八七名である。また、高知県全体の戦没者は二五三七名であった。

飯塚一幸氏は、「日露戦争においては、軍事援護団体（尚武組織）を通して民衆の自発性を引き出し、『隣保相扶』の力によって出征兵士家族の救援にあたらせることが重視された」ことを指摘した上、京都府において多くの軍事援護団体が設置されていたことを紹介している。<sup>③</sup>

日露戦争期の高知県でも、兵事会と呼ばれる軍事援護団体が市町村ご

とに組織された。

日露戦争の戦没者の葬儀は、そのほとんどが郷里で執行された。葬儀は、市町村を単位とし、兵事会などを執行主体とした公葬として行なわれた。執行場所の大半は地域の学校であったが、川原などの空地も利用された。葬儀終了後、埋葬まで行なうのが一般的なあり方であった。戦没者の多くは、忠魂墓地に葬られた。

忠魂墓地とは、日露戦争の戦没者を葬るために市町村を単位として設けられた戦没者専用の墓地のことである。日露戦争期に、県内の過半数の市町村に設置された。

総じて、高知県では、日露戦争期に軍・戦争を受容する地域の基盤が形成されたといえることができる。

いうまでもなく、日清戦争は近代日本における最初の本格的な対外戦争であり、地域社会と軍・戦争とが強く結びつけられ始める出発点となった。しかし、高知県に関しては、「軍隊」が置かれていなかったためか、この時期の動向に対してほとんど関心が向けられてこなかった。よって、先に述べた日露戦争期の前史については、基礎的な事実すら明らかにしていないのが現状である。

本稿では、これまで明らかにしてきた日露戦争期の実態から「補助線」を引くことによって、戦没者とその慰霊の問題を中心に、日清戦争期の「戦争と地域」の実態を説明することに挑む。

本文は次のように構成される。第一章では、高知県からどのくらいの数の青年男性が日清戦争へ従軍したのかという問題を考えた上、地

域における戦没者慰霊を考える際に確認すべき軍事援護の動向に着目しながら、高知県の地域社会による日清戦争への対応の概略を描く。第二章では、戦没者の数や属性について明らかにすることに努め、それを踏まえて慰霊の諸相について考える。

このような課題を掲げているものの、本稿は根本的な「限界」を抱えている。それは、この時代の史料の残存状態が極めて悪いということである。

とくに、高知県への日清戦争の影響を示す一次史料は、県にも市町村にもほとんど遺っていない。そのため、公文書以外の史料を活用せざるを得ない。

本稿で主に使用する史料の一つは自治体史である。自治体史の性格はそれぞれ大きく異なり、史料としての信頼度にも差がある。そこに注意するのは当然のことである。ただ、出征者や戦没者についての情報が掲載されている場合、行政文書を典拠としていることが多く、一般的に確度の高い情報を得ることが可能である。

二つめは、新聞史料である。ただし、この時期の地元紙で遺っているのは『土陽新聞』（以下、『土』と略記する）のみであり、残存状態もよくない。

三つめは、「石」に刻まれた文字である。高知県下には、日清戦争を記念する石碑や、戦没者を祀る忠魂碑、彼らの墓などが一定数現存している。フィールドワークによって得たそれらの「碑文」をできるだけ利用しながら叙述を進めたい。

これらの史料のみで、「日清戦争と高知県」の全体像を明らかにするのは難しい。それでも、地域が戦争に対応していく出発点である日清戦争期の状況について、概要だけでも把握しておく必要があると考える。現時点で参照できる史料を十全に駆使して、基礎的な史実をできる限り明らかにしていきたい。

本文に入る前に、検討の前提となる事項についていくつか確認しておきたい。

まず、本稿における「日清戦争」について述べておく。日本が清に宣戦布告したのは一八九四年八月一日であり、講和条約が締結されたのは翌九五年四月一七日である。両者間の期間が「最短」の日清戦争であろう。本稿では、原田敬一氏のいう「広義の『日清戦争』」という概念に従い、これよりも長いスパンで捉えることとする。すなわち、一八九四年「七月二十三日に始まり、台湾征服戦争が一段落して、大本営が解散した一八九六年四月」までと考えることとする<sup>4)</sup>。また、戦没者の範囲は、一八九四年七月から九六年末までに死亡した者とする。

本文では、高知県内の市町村で見られた動向に着目していく。そのため、市町村名が頻出することとなる。日清戦争期の市町村は、名称もその区域も現在とは全く異なる。よって、市町村名の表記の仕方に關して明示しておく必要がある。この点について、当該期の市町村の状況も含めて述べておく。

一八八八年四月に公布された市制・町村制が高知県に施行されたのは翌年四月のことである。この時、一市二町一九四村が設置された（市

は高知市、町は須崎・後免の両町）。その後、一八九三年に吾川郡木塚村が西分村・芳原村に分割されたため、一九五村となった。このままの状態で日清戦争の開戦を迎えている。また一八九一年四月に高知県に郡制が施行され、幡多・高岡・吾川・土佐・長岡・香美・安芸の七郡が置かれていた<sup>5)</sup>。

それ以降、他府県と同様に市町村合併が進められ、自治体数は減少の一途をたどった。二〇一八年現在、高知県下には一一市一七町六村が存している。

本文で市町村名を記す場合、日清戦争期のそれを（「旧」を付さずに）そのまま示し、初出時に市町村名の後の括弧内に現在のどの市町村域に位置していたのかを（「〇〇市の一部」）という形で示すことにする。

## I 日清戦争と高知

### 1 日清戦争期の兵役と高知県からの召集兵

本章では、日清戦争が高知県に与えた影響について具体的に明らかにしていく。はじめに、日清戦争に際し、戦場に赴くなど、兵士として軍務に服した高知県民がどのくらいいたのか、という点について検討したい。

前提として、この時期までの陸軍の編制と、高知県民の入営先について確認しておきたい。

一八七三年一月の軍制の改正によって、全国は六つの軍管に分けら

れ、各軍管に鎮台が置かれた。この時、高知は広島鎮台が置かれた第五軍管に属した。<sup>⑥</sup> よって、徴兵令の施行時、高知で徴兵された青年は広島に入営していた。一八七五年には、同軍管下の香川県丸亀に歩兵第一二連隊が置かれ、<sup>⑦</sup> 高知県人の入営先はここに替わった。高知県全体については不詳であるが、佐川村（佐川市の一部）からは、広島に二名、丸亀に四名が入営したという。<sup>⑧</sup>

一八八四年、愛媛県松山市に歩兵第二二連隊が発足した。<sup>⑨</sup> これ以降、高知県に四四連隊が置かれるまで、高知県民の入営先は、同連隊となった。すなわち、日清戦争期、徴兵された高知県民の入営先は松山であった。また、一八八八年には、鎮台に代わって師団が創設され、広島鎮台は第五師団となった。二二連隊は同師団に所属した。<sup>⑩</sup>

二二連隊は、日清戦争において大陸へと出動した。その際の動向について簡単に見ておく。<sup>⑪</sup> 第五師団に動員が下令されたのは一八九四年六月一三日である。二二連隊は、八月三日より松山を發ち韓国へと渡り始め、連隊主力は八月一五日に釜山港に入った。その後、大陸では北西へと移動しながら、各地で戦闘を繰り返した。講和により戦争が終結した後、一八九五年七月一三日より大連港を出發し、二十七日までに高浜港（愛媛県三津浜町、現在の松山市の一部）に上陸した。復員の完了は八月六日である。

先に見たように、高知県において徴兵された男子の多くが二二連隊に入ったと考えられる。しかしもちろん、日清戦争において軍務に服した者がすべて二二連隊の所属であったわけではない。（歩兵以外の）

特科兵や、いわゆる職業軍人など、二二連隊以外に属していた者についてはさまざまなケースが想定できる。詳細な検討はできないが、ここでこのことを確認しておきたい。

それでは、高知県からはどのくらいの数の男性が日清戦争に参加したのか。結論からいえば、このことに関する統計が残っていないため、明確な数を示すことはできない。ただし、その状況が分かる町村は少なからずある。それらの事例を見ることによって、出征数の概略を掴みたい。

この点を明らかにするための手がかりの一つが自治体史である。郡全体の出征数が判明するのは高岡郡である。一九二三年刊の『高知県高岡郡史』には、「此の大戦役に参加したる本郡出身の忠勇なる将卒は惣計四百六十三名」とある。<sup>⑫</sup> また、同郡の須崎町・多ノ郷村・吾桑村（いずれも須崎市の一部）からは、それぞれ二四名・一三名・一〇名の出征者を出したという。<sup>⑬</sup>

出征者の氏名まで判明しているのは次の八村である。以下、出征者数と共に列挙する。三里村（高知市の一部）一八名、<sup>⑭</sup> 西分村（同前）六名、<sup>⑮</sup> 岡豊村（南国市の一部）二〇名、<sup>⑯</sup> 東川村（安芸市の一部）九名、<sup>⑰</sup> 田村（南国市の一部）一〇名、<sup>⑱</sup> 能津村（日高村の一部）七名、<sup>⑲</sup> 大野見村（中土佐町の一部）八名、<sup>⑳</sup> 長者村（仁淀川町の一部）六名。<sup>㉑</sup>

氏名以外に、出征者に関する諸情報を得ることができる町村もいくつかある。尾川村（佐川市・越知町の一部）の出征者は一二名で、一名が歩兵で、一名が砲兵だという。<sup>㉒</sup> 日下村（日高村の一部）からは

一三名が出征し、その内歩兵が一〇名、砲兵・「衛兵部」・海軍が各一名である。<sup>(23)</sup> 加茂村(佐川市・日高村の一部)からは、四名が出征しており、そのうち三名が二二連隊に属し、一人は「台湾憲兵第二区隊付」だったという。<sup>(24)</sup> 蕨岡村(四万十市の一部)からは九名が出征し、その内訳は歩兵七名、砲兵・騎兵各一名だったという。<sup>(25)</sup> 仁井田村(四万十町の一部)からは、陸軍の四名、海軍の三名が出征し、前者は「第五師団騎兵第五大隊軍曹」「第五師団砲兵」「第四師団砲兵伍長」「曹長」、後者は「鑑乗組一等主厨」「二等 全」と不明一名であったという。<sup>(26)</sup> 稲生村(南国市の一部)の従軍者は六名で、全員が陸軍で歩兵が五名(軍曹・二等軍曹・上等兵各一名、一等卒二名)、砲兵(二等卒)一名だという。<sup>(27)</sup>

一九三五年に著された『三崎村郷土研究』には、同村(土佐清水市の一部)の一三名の出征者について、氏名と出身集落、陸海軍の別と兵種・階級が記されている。後者について記せば、歩兵一等卒四名、歩兵上等兵二名、「歩兵」(階級不明)二名、騎兵一等卒・砲兵一等卒各一名、「海軍吉野一等水兵」一名、不明二名となっている。<sup>(28)</sup>

町村内の従軍者について最も詳しく記されているのは、一九一九年刊行の『佐川町誌』<sup>(29)</sup>である。同書には、佐川村からの出征者三四名の「氏名 兵種官等 所属部隊」が記載されている(一六一・一六二頁)。それによれば、陸軍が三三名で、海軍は一名である。陸軍三三名のうち三一名が第五師団に属し、二二連隊が二三名(伍長・上等兵各四名、一等卒一四名、看護手一名)、一二連隊一名(二等卒)、工兵第五大隊

一名(一等卒)、輜重兵第五大隊(輜重輪卒)六名である。その他、第四師団歩兵第八連隊一名(上等兵)、近衛歩兵第一連隊一名(一等卒)となっている。海軍の一名は、佐世保鎮守府に所属する「海軍一等尉宰」である。

また、同書には軍による動員についての記述もある(一六〇・一六一頁)。これによって、彼らがどのように召集されていたのかが分かる。

明治廿七年六月十三日充員召集ハ発令アリ応召者ハ予後備各兵科下士卒ニシテ輜重輪卒ハ全部除外セリ其人員十二名ナリ

全年七月廿三日後備兵全部ノ召集ヲ令セラレ応召員十二名翌廿四日出発ス内歩兵七名輪卒三名看護婦一名工兵一名ナリ

八月三日海軍予後備兵下士卒ノ召集アリ応召員ナシ

高知県における兵の召集の様子を知ることのできる史料は管見の限りこれ以外にない。ここにあるのは佐川村の状況であるが、高知県下全域で同様の日程によって動員されたものと考えられる。

「はじめに」でも述べたように、県内の各地に日清戦争を記念する記念碑が残っている。その中には、従軍者の氏名が記されているものもある。自治体史等の「紙」の記録がなく、「碑文」のみに氏名が記されているケースもある。以下、それらについて見ていく。

香南市香我美町上分には、日清戦争と山南村(香南市の一部)との関わりについて記す「山南紀功碑」が現存している。<sup>(30)</sup> 同碑は、自然石を用いたもので、一八九七年に建てられたという〔図1〕。同碑には、





〔図1〕 山南紀功碑（※写真は全て小幡撮影）

「征清之役」に従軍した「高知香美山南兵士十三氏」の階級・勲位・氏名が刻まれている。全員が陸軍の所属で、一〇名が歩兵であり、「二等軍曹」二名、「二等軍曹」一名、上等兵一名、一等卒五名、二等卒一名である。他に、砲兵一等卒二名と三等看護長が一名いる。

碑文には、戦時中の彼等の動向について述べられている。彼等は全員「第五師団」に属し、そのうち九名が出征し、松山兵営に一人、広島兵営に二人、さらに「馬関」に一人残ったという。

香南市香我美町山北にある山南村の隣村である山北村（香南市の一部）の「討清戦争記念碑」と刻まれた日清戦争記念碑（一九〇五年建設）の碑文によれば、「山北村従軍者」は二名だとい<sup>1)</sup>う。彼らの階級等については記されていないが、軍務において果たした役割について

は記されている。二人は病気に罹って除隊し、一人は広島で「補給廠」の業務に服し、一人は輜重に当たり、一人は馬関で守備に当たった。一人は清で衛生隊に属し、一人は馬関守備についた後に朝鮮半島に渡り「朝鮮賊徒戦」に参加した。四名が、平壤を陥落させ清国を転戦し功を上げた、という。

西川村（香美市・安芸市・香南市の一部、山南村・山北村と隣接）の日清戦争従軍者を記した石碑も、香南市香我美町中西川に遺ってい



〔図2〕 西川村の記念碑（左）・忠魂碑（右）



る〔図2〕<sup>32)</sup>。表面に「記念碑」と刻まれ、裏面の碑文の最後に一九一五年十一月と記されているこの碑には、日清・日露戦争の出征者の氏名・陸海軍の別・兵科・階級・勲功が記されている。人数は、「日清日露両役」に一三名、「日清役」に六名である。別に、日清戦争の「内地勤務者」三名の氏名もある。二二名全員が陸軍所属で、「両役」では、歩兵・砲兵・輜重兵の軍曹が一名ずつ、工兵上等兵・歩兵一等卒がそれぞれ一名、砲兵一等卒六名、輪卒二名である。「日清役」では、工兵伍長・歩兵上等兵・砲兵上等兵・工兵上等兵が一名ずつ、砲兵一等卒が二名である。内地勤務者は全員歩兵一等卒である。

別府村（仁淀川町の一部）にも同様の碑が存する（仁淀川町森）。一九一三年に建てられた「高岡郡別府村出身日清日露ノ戦役凱旋軍人記念碑」<sup>33)</sup>がそれである。その碑には、「明治二十七八 三十七八年戦役従軍者」一名、「二十七八年戦役」六名の氏名が記されている。つまり、同村の日清戦争従軍者は一七名である。<sup>34)</sup>

香南市夜須町羽尾にある臨済宗長谷寺（槇寺）に関する資料を集めた『まきでら 長谷寺資料誌』<sup>35)</sup>には、同寺の境内にある「日清之役従軍碑」についての記述がある（二八七・八頁）。この碑は、東川村（香南市・芸西村の一部）の日清戦争従軍者について記したものであり、正面には戦没者である小松志解久への追悼文、側面に従軍名簿（一五名）があるという。碑文末尾には「明治二十九年五月日<sup>マ</sup>」とある。戦争終結後まもなく建てられたものようである。従軍者の氏名には、階級・勲位が付されている。階級のみ記せば、歩兵二等軍曹二名、陸

軍三等書記・歩兵上等兵・騎兵一等卒各一名、歩兵一等卒六名、同二等卒二名、「輜重兵」一名、「陸軍々夫長」一名であり。最後の一名が、同寺の住職だという。

ここまで、日清戦争において軍務に服した人々についてごく簡単に見てきた。はじめに断っておいたように、出征者に関する統計は存しない。加えて、各市町村の人口が記された高知県統計書は、一九〇三年分から調査が始まっており、それ以前の統計はない。よって、正確なデータに基づいた統計的な検討は不可能である。

本節で紹介した「数字」からは、「郷土部隊」がなかったこの時期においても、県下の市町村から一定程度の数の成年男性が「兵」として送り出されていたという事実が判明した。例えば、既に紹介したように高岡郡全体の出征者は四六三名、同郡内の須崎町・多ノ郷村・吾桑村は二四名・一三名・一〇名であった。少し後の一九〇三年の高知県統計書によれば、高岡郡の総人口は一万九千九百四十四人、須崎・多ノ郷・吾桑は六六一八、五一七七、二九二九名である。この数字からだけでも、日清戦争への動員が地域へ無視し得ないインパクトを与えたことが想定できよう。

## 2 日清戦争と地域社会

本節では、高知県下の地域社会が見せた日清戦争への対応について、軍事援護を中心にその概略を見ていく。

前掲『佐川町誌』の「兵事」の章には「日清戦役」の項があり、そ

の中で「後援事業」が取り上げられている（一六〇頁）。以下にその全文を引く。

明治廿七年八月八日五所神社ニ於テ戦勝祈念並町内出征軍人安全ノ祈願祭典ヲ執行シ村民三百余名ノ参拝アリ

村役場員及村内有志ハ個々ニ出征軍人ノ家族ヲ慰問シ或ハ物品ヲ贈リ家族ヨリ出征者ニ送ル書簡ノ認メ方ニ付キ便宜ヲ計リ双方ノ慰安ヲナセリ

出征軍人ノ隣保又ハ部落組合ニ在リテハ農事作付並ニ其修理且収穫ノ業其他ノ家事ヲモ相援ケテ家族ノ保護ニ努メタリ

一文目には、村内の神社で「戦勝祈念」と「出征軍人安全」を願った「祈願祭典」を行ない、多くの村民が参加したことが述べられている。このような動向は県下に広く見られた。

日清戦争が始まってまもなくの間、『土』の広告欄に神社への祈願の告知が多く掲載された。例えば、『土』一八九四年八月二三日には、「日清開戦ニ就テ我力在韓兵長岡郡大篠村大埴部前田勝吉氏幸福安全々勝国威発揚之為本村熊野神社並ニ住吉神社ニ於テ本月廿一日廿二日ト祈願仕候ニ付信徒ハ勿論愛國之志士参拝アレ」との広告が掲載されている。この広告の「發起人」は大篠村（南国市の一部）同部の六名である。また、同月五日の同紙には、「清韓事件ニ付本邦軍人身上堅固強運之為メ土佐郡潮江村天満宮に於て明五日ヨリ七日迄祈禱執行之上右三日ニ限り寸志ヲ以テ守札授与致シ候間御同感之諸君ハ御参拝アランコトヲ希望ス」（平仮名は原文のまま）との広告が載っている。

ここには、神社によるものを紹介したが、それだけではない。宗教宗派を問わず、神社仏閣等による出征者の「安全」と活躍を願い、戦勝を願う祈願や祈禱は盛んに行なわれ、多くの人々が参加したのである。<sup>(36)</sup>

『佐川町誌』からの引用の二文目には、郷里に残された家族を通じての戦地の兵士への「慰問」、三文目にはその家族への「保護」について述べられている。これは、同時代において「恤兵救族」と呼ばれた動きである。このうち、出征家族への「保護」の局面（Ⅱ「救族」）は、「兵役義務の履行から派生する」「応召者家族、傷痍軍人とその家族、戦傷病死者遺族らの生活救護などに関わる事業」、すなわち「軍事援護」といえる。<sup>(37)</sup>

この動向を考える場合、着目すべき点の一つは、先の引用にもある「有志」という語である。町村そのものや、地域住民組織といった定まった形ではなく、複数の「有志」が協力する形でこのような事業が展開されていることになる。

一八九四年八月一日、日本が清に宣戦布告をしたその日の『土』の紙面に「義挙彙報」という記事が見える。その中に、次の項がある。

○香美郡赤岡村長 小松与右衛門氏は這同村内にて非常召集されし兵士十一名の家属に各々一円づゝを恵与し猶該地有志と協議し目下右家族扶助義捐金募集中なりと

○吾川郡清水村 にては今回出兵せし予備後備兵家族救恤の為め同村川村玄泉岡林■（判読不能を示す。以下同じ。）次郎深田耕徹

等の諸氏発起となり村内有志と協議し全村十部落に各々二名づゝの周旋人を選挙し家族扶助義捐金募集中なりと

赤岡村(香南市の一部)と清水村(いの町の一部)において出征者を出した家族を援助する動きがあることを報じる記事である。赤岡村では村長が中心となつてはいるが、村内の有志に諮りながら動いている。清水村では有志が主体となつて援助事業を進めようとしている。

同年八月二日付の『土』の紙面の「敵愾の義氣」と題する記事の中には、佐川村の動向も見える。

佐川村有志の協議 高岡郡佐川<sup>マ</sup>有志は今回出兵したる家族扶助に付き去廿七日同村役場楼上に於て協議会を開きしに来会者六十余名一同■議し目下募金中なりと

村役場を会場としており、村そのものが何の関与もしていないとは考えられないものの、主体はあくまで有志なのである。新聞報道から、「有志による軍事援護」が県下に広く見られたことが分かる。

室戸村(室戸市の一部)では、一八九四年九月、「有志者の奮発にて全地倶楽部を恤兵救族義援金募集の事務所となし傍ら戦況を素人に知らしめんと掲示場を設け新聞紙の縦覧を許す等尤も尽力する所あり義金一百三拾五円八拾六銭一厘を醸集し内七拾円八拾八銭を武揚協会に寄贈し残金を村内の救族金となした」という。<sup>38)</sup> 義捐金を集めるだけでなく、新聞紙を利用した「戦況の報知」までもが有志の手によつてなされている。

ここにある「武揚協会」は、この時期、高知県全体で義捐金の徴募

を行なつた団体である。同会は、一八八四年に「軍人優待、軍人養成、恤兵救族の目的を以て、…民間有志者相謀りて」結成した団体である。<sup>39)</sup> 同会は、一八九四年七月三十一日、総会を開き次のように決議した。<sup>40)</sup>

一武揚協会積金三百円を以て朝鮮在兵の慰労及び目下入営兵の家族の困難者を救助等に支出する事

一在朝鮮兵へ慰物品<sup>マ</sup>及び入営兵の家属<sup>マ</sup>困難者救助等に対する義捐金事務取扱の爲め六名の取扱委員を撰定なし日々二名宛交代の上事務を所理すること

(中略)

一武揚协会会员ハ在韓兵慰労入営者家族救助ノ責任ヲ負ヒ義捐出金■分の出金をなす事

同協会は、土陽新聞社などと提携し、「恤兵救族義捐金募集」事業を広く展開した。<sup>41)</sup> これが、町村の有志によつて集められた義捐金の一つの受け皿となつた。

若干ではあるが、有志が新たな組織を形成する動きも見える。同年八月一二日の『土』の記事「片地奨武会」は片地村(香美市の一部)の動向を報じるものである。そこでは、「片地村有志は尚武の氣象を發揚し並に恤兵救族の義挙を奨励せんが爲め此程全地奨武会なるものを組織し」、会頭や幹事を選び、「目下恤兵救族義捐金」を募集している、とされている。

ここでは、組織の形成の点に加えて、活動の内容にも着目したい。この時に作られた「奨武会」は、「尚武の氣象を發揚」することと、恤

兵救族を同時に目指しているのである。本節の最初に引用した、佐川村の動向では、兵士の「無事」や戦勝を祈願することと、軍事援護が並列に置かれていた。県を単位とする組織である武揚協会も、「軍人優待、軍人養成、恤兵救族」の目的を掲げていた。

活動の詳細は不明ではあるが、これまで見た「有志」による事業や、少しずつ見られ始めた新たな組織は、ともに尚武組織と軍事援護団体の双方の性格を有するものであったということが確認できる。

講和が成った後の一八九五年一月六日の『土』に「遺族へ贈金」と題する記事が載り、「香美郡公報会より同郡征清忠死軍人の遺族へ贈られし金円」について「忠死人員は二十九人にて一人十円宛にて贈与せられた」と報じられた。

ここにあるように、この時期の「恤兵救族」事業においても、戦没者とその遺族を対象とする動向が見られるのである。

本節の最後に、一八九七年以降の動向を見ることによって、これらの動向が日露戦争期へと連続していくことを示したい。

一八九七年六月一日、「長岡郡在郷下士及び有志の士」が「一般尚武の気象を養成せんため同郡兵事会なるものを設立し」て「規約を定め」て役員を選出したという。<sup>(45)</sup>「規約」は次のようなものである。

一本会を名けて長岡兵事会と称し事務所は当分の内後免町に設置す

一本会は長岡郡在郷軍人を以て正会員とし軍人以外の者にして本会を賛成するものを賛助会員とす

一本会は左の諸項を以て目的とす

一 在郷軍人の品位を保持すること

一 一般尚武の気象を養生し体育上の進歩を計ること

一 兵事に関する諸件を研究すること

一新兵入営前に当り幹事或は委員各所に派遣し入隊後の心得方を談話すること（後略）

同様の動向は他郡でも見られた。<sup>(45)</sup>同年七月には香美郡でも兵事会が設立され、「高知県香美郡兵事会規則」が制定されている。<sup>(46)</sup>

一八九八年頃から、町村にも兵事会が設置され始めている。一宮村（高知市の一部）では、同年一月「兵事会なるものを設け軍人を優待し且在郷軍人に対しては平素諸規則を守りて違反者ならしむるを期し従来各地に行はる、送別宴会及び余興等を廃し新兵一名に対し金十円を贈呈する事とし」たという。<sup>(45)</sup>翌一八九九年には久礼田村（南国市の一部）でも結成が確認できる。<sup>(46)</sup>

この時期は、平時であったためか、軍事援護団体の側面が前面に出ず、尚武組織としての性格が強く打ち出されている。「はじめに」で述べたように、「兵事会」はこの後、日露戦争下において県下の市町村のほとんどに設置され、軍事援護団体として大きな役割を果たす。その萌芽が有志による活動であり、この時期に現れ始めた組織が後の組織へと繋がっていくのだと考えられる。

本章では、高知県下の町村と日清戦争との関わりについて考えた。正確な数値は分からないものの、各町村から決して無視し得ない数の

出征者を出していたこと、彼らと彼らの家族を支援するための自発的な動きが各町村で見られ始めたことを確認することができた。次章においては、出征者のうち、戦争によって命を失った者たちと彼らに対する慰霊について考える。

## Ⅱ 高知における日清戦争戦没者慰霊

### 1 高知における日清戦争戦没者

本章では、一章で明らかにした史実を踏まえて、高知県における日清戦争戦没者の慰霊の態様について明らかにし、その意義について考えたい。

本節では、高知県民より生じた日清戦争の戦没者に関する基礎的な事実、つまり何人の人が亡くなり、その人たちはどのような人々であったのか、その属性や「死をめぐる状況」などについて、できる限り詳しく見たい。

はじめに戦没者数を取り上げる。まず、日清戦争全体について確認しておく。原田敬一氏によれば、陸軍の戦没者は、「戦死」（戦傷死を含む）「二四一八名、戦病死一万一八九四名（ほかに変死一七七名）」である。ただし、ここには「兵站輸送を担当した日本人軍夫（一五万四〇〇〇名）」の死亡者が含まれていない。陸軍の分と軍夫、そして海軍の分を合わせると「約二万名が日清戦争での死亡者」であるという。<sup>47)</sup>

原田氏が典拠としているのは、参謀本部編『明治二十七八年日清戦

史』第八巻の「減耗人員階級別一覧表」である。同書には、「減耗人員師団別一覧表」も収録されている。<sup>48)</sup> それによれば、歩兵第二連隊の属する第五師団の死亡者は計二〇六〇名、内訳は戦死三一一名、戦傷死七一名、戦病死一六一二名、「変死」六六名である。

また、前掲『歩兵第二十二連隊歴史』によれば、大陸への渡航から一八九五年八月の復員完了までの戦死者の総計は「将校三名下士以下三十一名」という（三三頁）。ここには戦傷死・戦病死者が含まれていないものと思われる。典拠ははっきりしないが、連隊の「出征以来の死者は二百二十人。うち戦死四十四人、病死百七十二人、溺死一人。戦傷者は百三十二人。しかしこのほかに、戦場の苛酷さに耐えかねてみずから生命を絶った兵が三人いた」とする文献もある。<sup>49)</sup>

すでに述べたように、高知県の日清戦争出征者についての統計は存しない。もちろん、戦没者の統計もない。そのため、戦没者数についても、さまざまな史料から考えていく必要がある。

唯一、統計が遺っているのが幡多郡である。<sup>50)</sup> 同郡の三十六村のうち、戦没者を出したのは二二村で、総数は三九名である。このうち三名は一八九六年の台湾征服戦争時の戦没者である。戦没者のほとんどは兵卒で、下士官は三名、それ以上の階級の者はいない。町村別に記すと、中筋村四名、奥内・佐賀村三名（うち下士官一名）、下川口・津大村三名、入野村二名（うち下士官一名）、下田・白田川・具同・後川・中村二名、月灘・上灘・東山・小筑紫・宿毛・橋上・三原・蔵岡・山中・江川崎・東上山村一名である。<sup>51)</sup>



また、高岡郡では四六三名の出征者のうち、「戦病死者四十九名廃兵となりたる者四名」であったという。<sup>②</sup>内訳は不明である。

ここからは戦没者一人一人について視野に入れて考えていく。最初に確認すべきは、上海事変（第一次）までの戦没者を知る上で最も基礎的な文献である『靖国神社忠魂史』である。昭和初期に靖国神社が陸海軍の協力を得て編んだ同書（同神社社務所、一九三五年）には、靖国神社に祭られている戦死者各人について、戦争別に「所属部隊号、戦死、病死及び不慮死の年月日」と場所、「官職等級、氏名（…）、原籍（府県名）」（「凡例」）が記されている。その『第一巻』（以下、『靖一』とする）では、日清戦争（台湾征服戦争も含む）の戦没者が扱われている。そのうち、高知県に本籍を有する者は二五三名である。以下、この二五三名を核に、高知県の日清戦争の戦没者についてできるだけ詳しく明らかにしていきたい。

まず、『靖一』から得ることができるデータを整理して示したい。最初の戦没者の死亡年月日は一八九四年九月一五日、「最後」のそれは一八九六年二月一七日である。死亡年は、一八九四年が九四名、九五一年一五五名、九六年四名となっている。

所属部隊は以下のようになっている。第五師団が一九七名（二連隊四名、二二連隊一四三名、後備歩兵一〇大隊九名、同一九大隊一〇名、その他三一名）、近衛師団三二名、台湾憲兵隊四名、海軍が七名、その他一三名である。

階級は、輜重輸卒一八名、二等卒六九名、一等卒一〇二名、上等兵

二六名、二等軍曹九名、一等軍曹八名、中尉二名、大尉三名、一等水兵二名、その他一四名である。

死亡場所は以下の通りである。戦地（台湾を含む）が一六五名、うち戦場が二五名、兵站病院が八六名（仁川一三、万里倉・基隆各七、台北・平壤・竜山・金州各六、その他三五）、倉宮病院一七名、定立病院六名、野戦病院七名、患者集合・宿泊所一五名、「牛荘仮纏帯所」三名、その他六名。船上で亡くなった者は二二名で、「黄海（大羊河口沖艦内）」が四名、「帰航ノ際船内」三名、その他五名である。

国内で死亡した者は七六名を数える。その内、広島陸軍予備病院が四四名、松山陸軍予備病院二三名、松山衛戍病院一名、佐世保鎮守府病院一名、避病院六名、「帰郷療養中」一名である。

『靖一』には、戦死者と戦傷・戦病死者の区別が記されていないので判然としないが、死亡場所から後者の割合が非常に高かったことが推認できよう。

日清戦争戦没者についての情報を得ることのできる材料は、『靖一』の他にもいくつかある。その一つが自治体史である。高知県内の自治体史には、行政文書を典拠とした戦没者名簿が記されているものが比較的多い。

もう一つの情報源は、『土』である。残存状態が悪いという大きな限界はあるものの、軍による発表を元にした記事や、遺族や地元関係者による死亡広告・葬儀広告・会葬御礼等は、同時代の情報として重要なものである。これらを見ていくことによって、『靖一』に記載がない、



すなわち「靖国神社に祀られていない」戦没者の存在を知ることができる。

野市町史編纂委員会編『野市町史 下巻』（同町、一九九二年）所載の「戦没者名簿」の「旧野市町関係」（ただし、この時期は「村」の個所に、杉村伝治という名がある（四四九頁）。階級は「砲一卒」で、没年月日は一九九五年七月一九日、死亡場所是不詳だという。同年一〇月一日の『土』紙上には、杉村の葬儀広告を見出すことができる。そこには、「香美郡野市村字上野故陸軍砲兵一等卒杉村伝治儀清国ヨリ凱旋ノ所広島ニ於テ病死」と記されている。『靖一』に杉村の名はない。

また、北川村史編集委員会編『北川村史 通史編』（同村教育委員会、一九九七年）の「戦没者一覧」には日清戦争期の戦没者が四名含まれている。そのうちの三名は、『靖一』に記載がない。三名を「氏名（階級・戦没年月・戦没地、掲載頁）」のように記せば、尾崎且爾（陸軍一等卒・一九九五年一月・不明、一二三七頁）、寺尾菊次（陸軍上等兵・一九九六年五月・松山連隊、一二三八頁）、箭崎鹿太郎（砲兵一等卒・一九九四年十二月・不明、一二四一頁）である。<sup>(53)</sup>

杉村と北川村の三名の他に、自治体史において日清戦争の戦没者として扱われているにもかかわらず『靖一』に記載のない者は、二〇名確認できる。<sup>(54)</sup>以下、出身市町村・氏名（所属階級等）・死亡年月日・死亡の場所と状況の順に記して列挙する（記載のない項目は「不明」を示す）。清水村（いの町の一部）・加藤政吉（陸軍上等兵）・一九九四年二月二一日・清国盛京省<sup>(55)</sup>・中筋村・土居守一（陸軍上等兵）・同年七月

二九日・香港陸軍病院、東上山村・室津良秀（歩兵一等卒）・同年二月六日・病気となり内地帰還の途次船中で死亡、西豊永村（大豊の一部）・北村林吾（陸軍軍属）・一九九五年二月二六日・金州城<sup>(56)</sup>・同村・大利節蔵（陸軍軍属）・同年四月三日・「外地」、上八川村（いの町の一部）・曾我楠寿（陸軍二等卒）・同年四月二日、多ノ郷村（須崎市の一部）・谷福次（歩兵一等卒）・同年六月三〇日・韓国明川「患者療養所に於て戦病死」<sup>(57)</sup>・山田野地村（香美市の一部）・上村英親（軍医）・同年、徳王子村（香南市の一部）・百田寅吉（陸軍一等卒）・一九九六年一月三〇日・「台湾、澎湖島」<sup>(58)</sup>・三原村・池上清太郎（陸軍一等卒）・一九九六年四月二日・松山衛戍病院、奥内村・長岡徳太郎（陸軍一等卒）・一九九六年七月七日・台湾澎湖島、池川村（仁淀川町の一部）・山岡久次・同年一〇月・松山兵営、鏡村（高知市の一部）・森本鹿次（陸軍一等卒）・同年十二月六日・台湾島台北衛戍病院基隆分院、宿毛村・佐野広吉、長岡村（南国市の一部）・門田福馬、黒岩村（越知町の一部）・田村駒吉、<sup>(59)</sup>（一九八四年時点の）越知町（日清戦争期に存したどの旧村出身かは不明）・西川徳治、<sup>(60)</sup>高知市（高知市の一部）・田所輝馬（歩兵一等軍曹、同・伊藤菊松（憲兵上等兵）、同・深尾直身（歩兵一等卒）<sup>(61)</sup>。その他にさらに三名の戦没者を挙げることができる。この三名は、いずれも『靖一』にも自治体史にも記載のない者である。最初の一名は、『高知市出身 忠霊塔英霊名簿』（高知市史編纂室所蔵）に記されている岡本金太郎である。この史料は、一九四一年六月に竣工した高知市の忠霊塔に祀られているとされた人々の名簿である。ここには、

日清戦争の戦没者も含まれており、その一人が岡本である。死没年月日は一八九五年八月二八日で、歩兵一等卒であったという。ただし、この史料は忠霊塔の竣工時以降に作成されたものであり、それ以前に存した町村についての記述はない。よって、一九四一年以降の高知市域出身であることは分かるものの、日清戦争時の居住市町村は特定できない。

二人目は、新聞紙上のみにその名を確認できる山崎儀太郎である。

『土』一八九五年二月一四日に掲載された「病死兵」という記事に、「輜重輸卒安芸郡馬路村山崎儀太郎氏は去月廿九日広島衛戍病院に於て病死したる旨高知大隊区司令部へ通知ありたり」とある。

三人目は、上田猪三郎である。彼の名は、紙媒体には見られないが、石碑上に確認できる。高知市春野町芳原に、一九五八年に建てられた芳原町（高知市の一部）の忠魂社が現存する。その敷地内ある「忠魂名」と記された石碑に同村出身戦没者の名が刻まれている。日清戦争戦没者の名は三名あり、そのうち『靖一』にないのが上田である。<sup>(14)</sup>上田については、氏名以外の情報はない。

『靖一』に掲載されている戦没者と、これまで挙げた者たちとを合わせると二八〇名となる。高知県においては少なくともこの数の戦没者が生じたといえよう。すでに述べたように、高知県の日露戦争戦没者は二五三七名である。高知県では、日清戦争において、日露戦争の一割強の戦没者が生じていたのである。

先に触れたように、『靖一』には本籍地の府県名のみが記され、市町

村名はない。しかし、自治体史、『土』、そして地域の戦没者慰霊施設などにその名を見出すことができる戦没者については、その出身町村を確認することができる。

先に述べれば『靖一』に名がある戦没者の内、出身市町村を特定できた戦没者は一八〇名である。逆に言えば、『靖一』に名のある高知県出身日清戦争戦没者のうち、七三名はその出身市町村が不明なのである。<sup>(15)</sup>

市町村別に見た場合、最も多くの戦没者を出したのは高知市である。『靖一』に名のない三名を含めて一七名確認できた。各町村から生じた戦没者は、五名以下に止まっている。五名の戦没者を出した町村は、上ノ加江村（中土佐町の一部）・宇佐村（高岡町の一部）・西豊永村であり、他の町村は四名以下である。

一八〇名のうちの過半数は、自治体史によって出身市町村が判明した。

『土』の紙面からは四四名の出身地が判った。その材料は、死亡を伝える記事、遺骨の到着や葬祭の様子を報ずる記事、死亡広告、葬儀広告、会葬御礼などである。また、靖国神社への合祀を報じる記事にも出身地が記されている。例えば、一八九五年二月二日の記事「靖国神社合祀の本県人」には、二二名の戦没者の名があり、これにより五名の出身地が判明した。

石に刻まれた碑文から出身地が明らかになった者も五名いる。四国霊場三四番札所である種間寺の境内には、同寺の所在地である秋山村



〔図3〕 故陸軍歩兵二等卒 平林岩吉土墓

（高知市の一部）出身の戦没者である橋本楠吾（歩兵二等軍曹）の事跡を記した石碑（一九〇三年建立）が現存する。<sup>⑩</sup>

墓からも二名の出身地が判明した。一人は、下川口村出身の平林岩吉である。土佐清水市大津に同村の忠霊塔（一九五四年建設）がある。その敷地には、戦没者の墓が七基ある。その一つが、「故陸軍歩兵二等卒平林岩吉土墓」〔図3〕である。これは、二二連隊所属であった平林（靖一）七二四頁）の墓なのである。

もう一人は、天坪村（大豊町の一部）の池田政司である。『靖一』によれば、池田は海軍一等水兵で、一八九四年九月一七日に巡洋艦松島の艦内で亡くなったという（六八九頁）。大豊町角茂谷に天坪村の忠魂墓地はある。そこには、一九七一年に建てられた忠霊塔と一一基の戦没者の墓がある。その内の一つが池田の墓〔図4〕である。自然石で造られたその墓には、「明治廿七年九月十七日」、「在松嶋艦戦死」など



〔図4〕 正八位故海軍一等水兵 池田政司墓

の文字が刻まれている。<sup>⑪</sup> 忠霊塔前に設置されている「戦歿英霊芳名」（一九六七年設置）にも「日清日露戦役」の「海軍」の個所に「一等水兵 池田政司」とある。

墓はないものの、戦没者慰霊施設に刻まれた名を確認できた者が二名いる。一人は松本喜勢馬である。いの町波川に川内村（いの町の一部）の忠魂碑（一九三八年建設）がある。同碑裏手の「殉国者霊名」（一九六四年設置）の冒頭に「日清戦役」「松本喜勢馬」と刻まれている。<sup>⑫</sup> これによって、『靖一』で、一八九四年一月二五日に草河嶺で没したとされている二二連隊第二大隊の二等卒・松本喜勢馬（七〇三頁）が、川内町の出身と知れるのである。

もう一人は、弘岡下ノ村（高知市の一部）出身の川田庫吉である。『靖一』の川田の個所（一〇三六頁）には、一八九五年一月二三日

に戦没したこと、近衛師団の二等卒であったこと、基隆兵站病院で亡くなったことが記されている。高知市春野町弘岡下にある同村の忠霊塔（一九五三年建設）横にある「戦歿者氏名」を記した石版には、「歩兵一等卒 川田庫吾<sup>マ</sup> 明治廿八年十一月廿三日 享年二十二」と記されている。<sup>80</sup>

更に、現地に残る一次史料によって、出身地が明らかになった者が二名いる。北原村（土佐市の一部）の出身の山本兼太郎・松本喜久次である。彼らの名は、一九四三年一〇月に同村銃後奉公会長が日本忠霊顕彰会に提出した「忠霊塔奉安分骨壺名簿」に見出せる。<sup>81</sup>

本節で検討した戦没者たちがどのように弔われたのかについては、節を改めて考えよう。

## 2 高知における日清戦争戦没者慰霊

本節では、前節で確認した戦没者たちが、どのような形で慰霊されたのかについて検討する。

最初に考えたいのは葬儀についてである。繰り返したように、本稿が依拠できる史料は限られている。葬儀の状況について知ることができる史料は、若干の例外を除き、『土』のみである。同紙の記事・広告によって葬儀の執行を確認できる者が六七名いる。ほとんどの葬儀は一人を対象とするものであるが、二人の合同葬が四件、三人のものが一件ある。よって、葬儀の総件数は六一件である。

尚、ここでは葬儀後の史料、つまり葬儀の様子を報じる記事や、会

葬御礼のみではなく、葬儀広告などの葬儀執行前の告知も含めている。よって、厳密に言えば葬儀の執行が確実とは言いい切れない事例も含まれていることをお断りしておきたい。

葬儀年月日がはっきりしないものも多い。葬儀執行年についてのみ述べれば、一八九四年三件、九五年五六件、九六年一件、不明（一八九五年か一八九六年か判然としないもの）一件となっている。

一番早い例として確認できるのは、一八九四年九月二〇日に執行された川島久吉（『靖一』六七六頁。以下、戦没者名の後の頁数は『靖一』の掲載頁である）の「埋葬式」である、これを報じる記事は次のように述べる。

安芸郡安芸村黒島部予備兵川島久吉氏（二十七年）は嚮に召集せられて渡韓し元山津より京城に赴く途中痼病に罹り終に竜山兵站病院にて死去したり依て去る廿日郷里に於て埋葬式を執行せしに会葬者非常に夥多しく郡吏警官村吏村会議員学校生徒青年会員練武館員及び実業諸団体等にも会葬したりと<sup>82</sup>

また、一八九五年一月二二日に行なわれた西森竹弥（九五四頁）の葬儀は次のようなものであったという。<sup>83</sup>

別府村故輜重輸卒西森竹弥氏遺髪埋葬式は去廿二日川渡磧に於て執行せり会葬者は郡吏村吏村会議員兵士学校生徒有志者等無慮一千八百余名数十名の吊詞祭文ありて先塋の次に葬る

さらに、同年一月二八日に行なわれた三宅熊太郎（九〇五頁）・東野喜代治（九三八頁）の合同葬は次のように報じられている。<sup>84</sup>



安芸郡野根村出征の近衛歩兵上等兵三宅熊太郎陸軍歩兵一等卒東野喜代治の両氏は征清の役に殊功を樹て孰れも去る八月中病を以て陣中に死歿し此程其の遺骨郷里に到着せしかば去月廿八日を以て埋葬式を為し本月一日慰霊祭を執行せしに僧侶十余名■し郡吏警吏村吏有志者等の祭典に参集する者二千有余名の多きに及び父老皆涙を垂れて之を惜まざるはなかりし（後略）<sup>(47)</sup>

ここに例示した三つの葬儀が、高知県における日清戦争戦没者の葬儀として典型的なものである。まず、儀式の呼称について見る。この三つの葬儀に共通しているのは埋葬式という呼び方である。葬儀のほとんどは、埋葬式、あるいは遺骨埋葬式、さらに西森の葬儀のように遺髪埋葬式と表記されている。ほとんどの史料で、葬儀と同義に使われており、その内容にとくに差異はないようである。葬儀の最後実際に埋葬を行っていたのかもしれないが、その詳細は不詳である。

葬儀の日程を確定しない葬儀広告のほとんどが「遺骨の到着次第」と記されており、日時が確定しているものも「遺骨が到着したため」という文言が入っていることが多い。遺族の元には、まず死亡通知がなされ、その後に遺骨（あるいは遺髪）が到着し、その後に葬儀を執行していた。葬儀において、遺骨・遺髪が実質的な意味を持ち得ていたことが分かる。

この頃、どのような形で遺骨が郷里に戻ってきていたのだろうか。それについて触れている記事の一つだけ見出すことができた。<sup>(48)</sup>

土佐郡鏡村字敷山より出征せし陸軍歩兵一等卒横山兼馬氏は凱旋の途次似島病院に於て去る十五日病死せしとの通知あるや親族及び同部落惣代は直ちに馳せて広島に赴き去る廿九日遺骨を携へて帰村せしかば本日を以て其の葬儀を執行する筈なりと

これによれば、遺族と地域の代表者が第五師団のある広島まで遺骨を受領に行っていることが分かる。他例がないため、一般的にこのようなことが行なわれていたかどうかは不明である。

次に葬儀執行の主体について検討したい。葬儀広告・会葬御礼には、親族の個人名がよく見られる。そして、それ以上に多く見られるのは「有志」という語である。

例えば、猪平清一（八〇二頁）・南部寅治（同前）の葬儀の準備を報じる記事には、「須崎町有志諸氏」が準備をしている、と記されている。二人の葬儀の広告も、「須崎町有志」名である。同様の例は非常に多い。

一八九五年一〇月一九日に執行された沢村正次（九五四頁、『靖一』では「政次」）の葬儀広告には「高岡郡尾川村有志」とあり、唯一の三名合同葬である笹徳治（一〇〇四頁）・野本大三郎（六七七頁）・恒光虎太郎（九三七頁）の葬儀（同年一二月六日執行）の広告も「香美郡夜須村有志」名である。「有志」の母体のほとんどが町村である。

前章で、当該期の軍事援護事業が町村の「有志」によって始められたことを述べた。軍事援護事業の対象の一つである戦没者の葬儀も、町村の「有志」によって担われていた。このことは、それらが公葬・市町村葬とまでも言えないまでも、公的な性格の強い「地域の葬儀」

として執行されていたことの現れだといえよう。

先に引用した事例にもあるように、葬儀の様子を報ずる記事で会葬者について触れられる場合、地域の官吏や地方議員、諸学校の教員・生徒が多く描かれる。このことも、戦没者の葬儀が公的な行事として認識されていたことを裏付けるだろう。

ただし、若干の留保も必要である。町村よりも小さな単位の有志の動向が見られる場合もある。一八九五年一月二二日に執行された恒石千恵次（九〇七頁）の葬儀の広告は「高知本町堀詰有志」名である。この例では、高知市内の市街地の一区画が単位であり、後の町内会のような範囲の有志が執行の主体になっている。

また、一八九五年一〇月一五日の紙面に掲載された福留吉吾（九三七頁）の葬儀広告は「香美郡曉霞村白川部有志」名である。<sup>95</sup>これは、村内の一集落の有志ということなのであろう。先に見たように、横山兼馬の遺骨を広島まで受け取りに行ったのは「親族及び同部落惣代」であった。町村ではなく、より実際の生活に即した単位の人々によって戦没者の「弔い」が担われた例もあったということなのであろう。町村が最も重要な基礎単位であったとは必ずしも言い切れない。

留保が必要なもう一つの点は、有志に止まらない組織も見られるということである。一八九五年八月二九日に掲載された鍵山良馬（九三七頁）の葬儀広告は「大楠植村報公会」名であり（同村は香美市の一部）、一八九六年六月三日掲載の大島繁馬（二〇八二頁）の葬儀広告は「岩村報公会」名である（同村は南国市・香美市の一部）。また、先に

挙げた杉村伝治の葬儀を報じる記事では、会葬者の中に野市村の「報公会員」がいたことが記されている。<sup>96</sup>前章で同様な例を紹介した際に述べたように、「報公会」は、軍事援護団体の萌芽的な形態の組織だと考えられよう。

次に、葬儀の場所について簡単に見たい。葬儀の執行場所について判明している事例は多くない。判明しているものは全て屋外であり、屋内を会場としていることが明記されている事例はない。

最も多いのが、川辺・海辺である。先に触れた猪平・南部の合同葬は、「須崎海辺」で執行されている。<sup>97</sup>これも先に触れた笹・野本・恒光の三名合同葬は「本村砂浜」で行なわれた。<sup>98</sup>

先に引用した西森の葬儀では会場が「川渡磧」であった。一八九五年一月二九日に東川村（安芸市の一部）で執行された有沢団次（九八五頁）の葬儀の会場は、「島田磧」であった。<sup>99</sup>川原を会場とする葬儀はこの他に七例を数える。

少し変わった事例としては、「田んぼ」がある。一八九五年一〇月二八日に佐古村（香美市の一部）の有志により執り行なわれた原松太郎（九四〇頁）の葬儀の「式場は一反余歩の田地を以て之に充て」たというのである。<sup>100</sup>この頃の町村では、「公的な場所」が屋外にしか見出せなかったということなのであろう。

次に、葬儀後の埋葬の地、すなわち墓地について見てみたい。先に述べれば、彼らを埋葬した墓所について、とくにはっきりとした特徴は見出せない。例えば、すぐ前に紹介した原松太郎は「同家の墓地に



埋葬」されたという。<sup>10)</sup>先に引用した西森竹弥の葬儀を報じる記事では、埋葬先が「先塋の次」、つまり先祖が葬られている墓地とされている。一八九五年四月二〇日に上ノ加江村の海浜で葬儀が執行された大内南洋（八〇二頁）は、その日の午後「衣笠山に埋葬」されている。<sup>102)</sup>「衣笠山」は、村内の地名のようである。

埋葬先が判明した戦没者の埋葬先は「先祖の墓」か地元の地名を冠した墓地のどちらかであった。つまり、彼らが埋葬されたのは、地域に普通にあつた家墓地だと考えられる。

既に述べたように、高知県では日露戦争期にほとんどの市町村に忠魂墓地が設置された。また、高知の郷土部隊たる歩兵第四連隊兵営近くには陸軍墓地が設けられていた。陸軍墓地の正確な設置年月日は不明であるが、四四連隊が置かれた時期とほぼ同時期だと考えられる。<sup>103)</sup>つまり、日清戦争期の高知県には戦没者のための特別な墓地はなかったのである。

日清戦争期においては、「戦没」という事実そのものは公的な出来事と受け止められ、葬儀も主に町村を単位としてほぼ公的な形で執行された。しかし、墓所に関しては他の死者と区別されることはなかったのである。

戦没者慰霊についての検討の最後に、現存する墓について述べる。既に本章第一節において現存する日清戦争の戦没者の二つの墓について述べた。現在までに筆者が確認している墓は（この二基を含めて）一七基である。

これらを見ることによって、戦没者の墓そのものの形態について確認する。また、日清戦争戦没者慰霊の「その後」、すなわち同時代以降の状況について、その一端を考える。

本稿が挙げる三つ目の墓は、安芸村の川島久吉のものである。これは、安芸市本町にある真慶寺の境内にある同村の忠魂墓地にあり、日露戦争の戦没者の墓二基と共に並んでいる。<sup>104)</sup>

四つ目は、東津野村（津野町の一部）の伊原徳右衛門（六七六頁）のものである〔図5〕。津野町新田にある「吉村虎太郎の像」の後ろ側にある忠魂墓地の一七基の墓の一つが伊原のものである。<sup>105)</sup>

五つ目は大津村（高知市の一部）の池田友太郎（九四〇頁）の墓である。高知市大津北浦にある同村の「忠魂碑」（形態は忠霊塔、一九五



〔図5〕 故陸軍歩兵一等卒 伊原徳右衛門之碑

三年建設）の敷地に一二基の戦没者等の墓がある。池田の墓は、一八六八年に起きた堺事件の「二烈士の墓」（同地にある説明板の語）と並んでいる。<sup>106</sup>

須崎村（須崎市の一部）の忠魂墓地には三基の日清戦争戦没者の墓がある。須崎市須崎にある同墓地は、忠霊堂を中心として六六基の墓が並ぶ広大な墓所である。そこに池川豊太郎（六七七頁）・南部寅治・柏原久吾（一〇〇四頁）の三名の墓がある〔図6〕<sup>107</sup>、既に述べたように、南部の葬儀は猪平と合同で執行されている。しかし、猪平の墓は同墓地にはない。また、柏原の墓に関してはいくつかの「謎」がある。

柏原は須崎村出身ではないようである。柏原の葬儀が一八九五年一月二三日に執行されることを告知する葬儀広告は、「戸波村浅井有志」名なのである。<sup>108</sup> また、柏原の墓の竿石には、正面以外の三側面に経歴・戦歴が刻まれている。その中に、両親が「高岡郡戸波村」の人であること、さらに遺骨が「郷里浅井山先塋之次」に葬られたことが記されている。<sup>109</sup> この墓は、形態はいたって「普通」であるが、正面には「柏原久五碑」と刻まれている。（確認はできていないが）戸波村にも墓があるのかもしれない。

須崎村と同様に、現在の須崎市域にある多ノ郷村の忠魂墓地にも日清戦争戦没者の墓が一つある。須崎市多ノ郷甲にある同村忠魂墓地（現在は「多ノ郷平和公園」と呼ばれる）は県下で最も大きいものの一つであり、二九二基の墓が林立する。その一つが、日清戦争で亡くなった堅田寅之助（九三八頁）のものである。<sup>110</sup>



〔図6〕 柏原久五碑（左端）・池川豊太郎墓（左から2番目）・南部寅治君碑（右端）



黒潮町有井川に白田川村の忠魂墓地がある。これも大規模なもので、一一七基の墓がある。その内の二つが日清戦争の戦没者のものである。一つは佐竹栄太郎（九三七頁）、もう一つは亀井与太郎（九三八頁）の墓である。<sup>11)</sup>

かつて筆者は大月町の戦没者慰霊の歴史について詳しく検討したことがある。<sup>12)</sup> その際に述べたように、同町域では町村毎ではなく、町制施行以前の単位である集落毎に忠魂墓地が設置されている。その内、春遠地区の忠魂墓地に渡辺佐太郎（六七七頁）の、弘見地区の同墓地に藪内吉馬（八二〇頁）・長岡徳太郎（『靖一』に記載なし）の墓がある。

大野見村でも二基の墓を見出した。中土佐町大野見吉野に、同村の忠魂社がある。その敷地の一角に、一三基の小さな墓石が並んでいる〔図7〕。<sup>13)</sup> これらは、西南戦争からシベリア出兵までの戦没者のものである。その中に、日清戦争で戦病死した高橋清三郎（七二二頁）・大西重次（九三八頁）の墓石もある。

一九五六年発行の『大野見村史』<sup>14)</sup>によれば、「終戦まで中央小学校々庭東隅の木立の中に乃木、東郷両將軍揮毫の記念碑を中心に営まれていた忠霊墓地は、占領政策によって教育施設内にあることが許されなくなり」、一九四六年に「招魂社（忠霊殿）」の敷地に移転したのだという。<sup>15)</sup> とするならば、先の墓石も建設時とは異なる場所にあると言うことになる。〔図7〕を見ると分かるように、一三基の墓石は非常に近接した状態で建っている。移転時に墓としての役割を終え、墓石の



〔図7〕大野見忠魂社敷地内の墓石群

みが置かれた可能性が高い。本稿では墓として扱っているが、「墓の痕跡」といった方が正しいのかも知れない。

筆者が確認できた一七番目の墓は、一八九五年七月二四日に「朝鮮開城患者集合所」で死没した、第五師団後備歩兵第一九大隊第三中隊の大尉石黒光正（九五五頁）のものである。石黒の墓は、高知市山手町の林の中にある。忠魂墓地ではない。

墓石がいつ作成されたものかはっきりしないので、確定的なことはいえないが、日清戦争戦没者の墓そのものは一般的なものと異なつた独特の形態を有している。彼らの墓は、（複数の被葬者のものではなく）個人の墓であり、戒名ではなく氏名と階級等が記されており、多くの墓に経歴・軍歴が記されている。ただし、一般の死亡者のものとは異なつてはいるものの、戦没者の墓の規格が統一されていたわけではない。

また、石黒の墓を例外として、他の墓は総て忠魂墓地に存する（あるいは「存していた」。このことと、先に述べた、「特別な墓所は設けられなかった」という見解は矛盾しない。筆者がこれまでの研究で明らかにしてきたように、時代が下るにつれて戦没者を顕彰する傾向は強くなり、それはそれ以前の戦没者へも及んだ。

例えば、一九四〇年代前半に（合葬墓の性格を有する）忠霊塔を建設する際には、日清戦争、あるいは西南戦争や幕末の志士までもを「合祀」する形が取られた。現存する日清戦争戦没者の墓も、日露戦争期以降に忠魂墓地が設置された際に移転されたり、新たに作られたりさ

れたことが想定できる。

最後に、高知県外に墓がある可能性について考察しておく。取り上げるのは、既に紹介した東上山村出身の室津良秀のケースである。

四十町大正に、大正町（東上山村が一九一四年に大正村と改称、一九四七年に町となる）の忠霊塔（一九五五年建設）の敷地に、一九〇二年に建てられたという「室津君記念碑」がある。同碑は、室津を悼み顕彰するもので、一八八九年に「廿二連隊第十中隊」に入り、日清戦争で「平壤九連城諸処」を転戦し、一八九四年一〇月二九日には「分路子」で病気に罹り、その年の一二月六日「帰航将達赤間関海峡」で二六歳で没したという軍歴を記している。この碑文中に、「葬於広島肘山陸軍墓地」という一節がある。つまり、広島比治山にある陸軍墓地の墓に葬った、というのである。

戦後、同墓地の保存運動に携わった中野潭は、「日清戦役に於て戦傷病のため、広島陸軍病院に収容死没せられた英霊は当時、我國の土葬習俗のため御遺体を出生地にお送りすることが出来ず」、比治山陸軍墓地に埋葬されたと伝え聞いている、と述べている。<sup>16</sup>

現在の比治山陸軍墓地は、戦前の姿を失ってしまったため、室津の墓が実際にあったかどうかを確認することはできない。しかし、ここに埋葬されていた可能性は高いと考えられる。

本稿で見た埋葬先が判明した戦没者は、室津を除きすべて県内に葬られていた。しかし、埋葬の態様が判明していない戦没者の中に、軍によって設けられた軍用墓地など、県外にある墓地に葬られた者もい

ると考えるのが自然であろう。

むすびにかえて

戦没者慰霊のあり方を核としながら、高知県下の地域社会が日清戦争にどのように対応し、どのような動向を見せたのかについて検討してきた。全体像を描くには史料が少なく、きわめて不十分な検討に止まったとはいえ、これまで知られていなかった基礎的な史実を明らかにすることはできた。本稿によって、日清戦争期の高知の戦没者をめぐる諸相について、その前提と大枠を提示することができたのではないだろうか。

本文の内容をごく簡単にまとめれば、以下になるだろう。日清戦争は、高知県の地域社会に大きなインパクトを与えた。県下の市町村は、萌芽的なものではあったものの、積極的な対応を見せた。この時期に「軍・戦争を受容する地域の基盤」が形成され始めたと評することができる。日露戦争期に示された、軍事援護事業の広い展開や、戦没者の公葬の定着や忠魂墓地の普及には、前提としてこの時の基盤があったのである。

ただし、日清戦争期においては、さまざまな局面で地域に一定の「独自性」が残されており、(国の主導による)画一的な動向ばかりが見られたわけではない。軍事援護団体は定型的な姿を現していなかったし、戦勝祈願の方法は神仏を問わず地域の意向によってさまざまな形で行

なわれていた。このような「余地」は、これ以降少しずつなくなっていくのである。

史料の限界が大きい本稿の検討は「雑」と言わざるを得ない。そのこともあり、本稿に残された課題はあまりにも多い。ここでは、大きな課題を二つ述べて、本稿を結ぶこととしたい。

一つは、本稿で明らかにした動向を全国的に位置付ける必要があることである。高知県内の動向についてある程度詳しく検討しているものの、それらにどの程度の普遍性があり、どの程度の独自性があるのか、については明確にできていない。一つだけ挙げれば、軍事援護事業という、全国的に見られる動向を扱いつつ、その位置付けについては検討できていないのである。十分ではないながらも、基礎的な史実を解明した本稿の地平から、全国的な動向との比較・対照を行ない、高知県に見られる動向の傾向や特質について考えていかなければならない。

もう一つは、戦没者の「兵士としての姿」を視野に入れる必要があるということである。本稿では、戦没者が「亡くなった後」にテーマを限定したため、各戦没者の経歴を紹介する際にその戦歴に若干触れるに止まり、「戦場での動向」については全く検討することができなかった。しかし、この点を検討することによって、「戦争と地域」の研究を更に深めることができるはずなのである。

一例を挙げよう。本文で現存する墓を紹介した際、石黒光正の墓について述べた。そこに記したように、石黒は第五師団後備歩兵第一九

大隊第三中隊の所属である。

甲午農民戦争における日本軍の動向について精密な研究が続いている井上勝生氏が明らかにしたように、同大隊は四国四県から召集され、一八九四年一〇月に始まった第二次東学農民戦争に「東学農民軍討滅隊として派遣され」た部隊である。<sup>19)</sup> 同隊は「全軍約六〇〇名余の兵力で」、「数十万名の農民軍を追い詰めて殲滅し、…、少なくとも数万名を戦死させ」ているのである。<sup>20)</sup>

既に述べたように、高知県に本籍を置く戦没者の中に一九大隊の将兵が一〇名おり、石黒と同じ三中隊の者も他に二名いる。また、出征して帰還した者の中にも「朝鮮賊徒戦」に参加したとされている者がいることは本文で述べた。

「将兵が戦場で何をなしたのか」について検討せずに、その慰霊の態様のみを論じたのでは、「戦争と地域」について総体的・立体的に捉えたことにならない。本来であれば、地域から出征した一人一人について、戦場でどのように戦ったのか検証する必要がある。戦没者については、その上で、どのような死を迎え、どのように弔われたのか、その全体を問うべきである。戦没者の問題を検討する際にも、「戦争が地域によって支えられた」側面をもつ意識すべきであろう。

また、このような視点を有することによって、本稿で示した史料をさらに「活用」することができよう。本文では、墓や石碑を紹介したが、そこに記されている碑文を十分に利用したとは言いがたい。それらの「碑文史料」を活用する余地はまだ十分にあるし、その必要があ

る。<sup>12)</sup>

日清戦争に限らず、戦没者の問題を考える際に、戦場まで視野に入れ、「戦場と墓を結ぶ線」を意識しながら検討することが必要であろう。これを今度の大きな課題として示しておきたい。

※本稿は、四国地域史研究連絡協議会大会第八回高知大会（高知近代史研究会第八三回研究会）「四国と戦争」（二〇一五年一月二八日）における報告「日清戦争と高知」を元に、報告後に得た知見も加えて執筆したものである。

## 註

（1）拙稿「高知県における戦没者慰霊」（坂根嘉弘編『地域のなかの軍隊五 中国・四国 西の軍隊と軍港都市』（吉川弘文館、二〇一四年）所収）において、日清戦争期から戦後に至るまでの展開について概説した。この中で、本稿で述べる内容についても若干触れている。

（2）詳しくは、拙稿「高知県における日露戦争戦没者慰霊」（高知大学文学部「臨海地域における戦争と海洋政策の比較研究」研究班編著『臨海地域における戦争・交流・海洋政策』（リール出版、二〇一一年）所収）を参照。

（3）「日清・日露戦争と農村社会」（井口和起編『近代日本の軌跡三



日清・日露戦争』（吉川弘文館、一九九四年）所収、一二二・一二六・一二七頁。

(4) 原田敬一『戦争の日本史一九 日清戦争』（吉川弘文館、二〇〇八年）、三八頁。

(5) 高知県編『高知県史要』（同県、一九二四年）、高知県市町村合併史編纂委員会編『高知県市町村合併史』（高知県、一九七四年）による。

(6) 一八七三年一月に発せられた徴兵令の「付録」（『公文録・明治五年・第四十三卷・壬申十一月・陸軍省伺』（国立公文書館所蔵、「公006661001」）所収の「徴兵令並近衛兵編成兵額等伺」に所収。

(7) 外山操・森松俊夫編著『帝国陸軍編制総覧 第一巻』（芙蓉書房、一九九三年）、一四八頁。

(8) 佐川町史編纂委員会『佐川町史（下巻）』（同町役場、一九八一年）、六七〇・六七一頁。

(9) 歩兵第二二連隊編『歩兵第二十二連隊歴史』（同連隊、一九三二年）（国立国会図書館デジタルコレクション [nd1.jp/pid/1452605](http://ndl.jp/pid/1452605)）による。

(10) 「勅令第三十一号 陸軍常備団隊配備表」「勅令第三十二号 陸軍管区表」（ともに一八八八年五月一二日、『法令全書 明治二十一年』）。

(11) 愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 近代上』（愛媛県、一九八六年）、七九一〜八〇八頁（「日清戦争と歩兵第二二連隊の戦闘」）

による。

(12) 高知県高岡郡役所編『高知県高岡郡史（復刻版）』（名著出版、一九七三年）、二八〇頁。

(13) 須崎市史編纂委員会編『須崎市史』（同市、一九七四年）、九二一頁。

(14) 三里尋常高等小学校編『村のことゝも 復刻版』（不明、一九七三年（原著は、同校、一九三二年））、三三三頁。

(15) 『春野町史料 第二集 西分村史』（春野町郷土資料館、二〇〇七年（原著は一九一五年編纂））、七六頁。

(16) 岡豊村史編纂委員会編『岡豊村史』（同村、一九五九年）、五四二頁。

(17) 「東川村政概要」（同村役場、一九三三年（安芸市史編集委員会編『安芸市史 資料編』同市教育委員会、一九八一年、所収））、四一〇頁。

(18) 南国市史編纂委員会編『南国市史資料 旧村誌編（三） 田村』（同市教育委員会、一九八八年（原著は一九三八年発行））、二二七頁。

(19) 日高村史編纂委員会編『日高村史』（同村教育委員会、一九七六年）、五四三頁。

(20) 『大野見村誌』（同村、一九一六年）、二四頁。

(21) 仁淀村史編纂委員会編『仁淀村史』（同村、一九六九年）、三六二・三六三頁。

- (22) 明神健太郎編『尾川の郷土誌』（佐川町誌編纂委員会、一九五六年）、一五四頁。
- (23) 『日下村誌』（一九一六年）、二三六・二三七頁。
- (24) 明神健太郎編『加茂村誌』（同村誌編纂委員会、一九七七年）、一八三頁。
- (25) 蕨岡村史編纂委員会編『蕨岡村誌——ふるさと再見——』（同委員会、二〇〇二年）、二二二頁。
- (26) 窪川町史編集委員会編『窪川町史』（同町、二〇〇五年）、三三六・三三七頁。所属・階級の表記は原文のまま。
- (27) 稲生村史編集委員会編『稲生村史』（同村役場、一九五五年）、一八・一九頁。
- (28) 三崎郷土史の会『三崎村教育会 新版 三崎村郷土研究』（土佐清水市、一九九一年）、三五五・三五六頁。
- (29) 西村亀太郎編、佐川町自治会発行。
- (30) 二〇一三年四月一三日確認。
- 拙稿「高知県大月町における戦没者慰霊の歴史」（『高知人文社会科学研究』創刊号、二〇一四年）でも述べたように、戦没者の墓、忠魂碑等は、移転されたり、撤去されたりすることがままある。そのため、史料として使用する際には確認した年月日を記しておく必要がある。本稿では、それぞれに確認した年月日を注記していくこととする。
- (31) 二〇一二年五月二二日確認。高知市立自由民権記念館編『高知市立自由民権記念館企画展 日清戦争とメディア』（同館、二〇一三年）の二八頁に同碑の写真が掲載されている。
- (32) 二〇一八年五月九日確認。
- (33) 二〇一二年四月一〇日確認。
- (34) 前掲『仁淀村史』にも「旧別府村」の「日清戦争従軍者」の氏名が掲載されている（三六二頁）。その氏名は、「記念碑」のそれと若干の異同がある。『村史』には、「碑」にない名前が三つあり、全二〇名である。また、「碑」と漢字の表記が異なる氏名が四つある。ここでは、「碑」に従った。
- (35) 池田宗石編著（長谷寺、一九八二年）。高知市立自由民権記念館編前掲書の二八頁に同碑の写真が掲載されている。
- (36) 四国霊場（八八ヶ所の「札所」）である寺院も例外ではなかった。その動向については、拙稿「戦争と四国霊場・遍路——高知の事例——」（『四国遍路と世界の巡礼』第一号、二〇一六年）、三七・三八頁を参照されたい。
- (37) 山本和重「軍事援護」（林博史・原田敬一・山本『地域のなかの軍隊九 軍隊と地域社会を問う 地域社会編』（吉川弘文館、二〇一五年）所収）、九八頁。
- (38) 「県内義挙報叢（続き）」（『土』一九九四年九月二三日）。「全地倶楽部」については不詳。
- (39) 高知市役所編『高知市史』（同役所、一九二六年）、二九八・二九九頁。また、外崎光広「武揚協会」（『高知県歴史辞典』（高知市

民図書館、一九八〇年）六五四頁。も参照。

- (40) 「武揚協会員惣会決議」〔『土』一八九四年八月一日〕。引用中の片仮名は原文のまま。

- (41) 例えば、一八九四年八月二日の『土』には武揚協会・土陽新聞株式会社・高知毎日新聞・高知日報の四者連名による「恤兵救族義捐金募集」広告が掲載されている。

- (42) 「長岡兵事」〔『土』一八九七年六月一五日〕。

- (43) 安芸郡「芸陽兵事」〔『土』一八九七年六月二五日〕、幡多郡「幡多兵事」同紙同年七月三一日〕。

- (44) 「兵事会議」〔『土』一八九七年七月一八日〕。

- (45) 「宮村兵事会」〔『土』一八九八年一月二三日〕。

- (46) 「久礼田村兵事会」〔『土』一八九九年二月二日〕。

- (47) 原田前掲書、二八二・二八三頁。

- (48) 東京印刷、一九〇四―〇七年。国立国会図書館デジタルコレク  
ション (ndjip/rid/774128)。

- (49) 客野澄博『二十二聯隊始末記』（愛媛新聞社、一九七二年）、一四五頁。

- (50) 高知県幡多郡役所編『高知県幡多郡誌』（名著出版、一九七三年（原著は一九二五年））、二二六・二二七頁（明治二十七八年戦役（戦病死者））。

- (51) 中筋・津大・下田・具同・後川・中村・東山・山中・江川崎の各村は、四万十市の一部。奥内・月灘村は大月町の一部。佐賀・

入野・白田川村は黒潮町の一部。下川口・上灘村は土佐清水市の一部。小筑紫・宿毛・橋上村は宿毛市の一部。東上山村は四万十町の一部。

- (52) 前掲『高知県高岡郡史』、二八〇頁。

- (53) 北川村の戦没者の「アルバム」として作成された（同書末尾の村長の「御挨拶」の表現）『遺影の写真集 国敗れて山川あり』（北川村遺族会、一九九一年）にも、この四名が日清戦争戦没者として載せられている（同書には頁数が打たれていない）。同書には、前掲『北川村史』よりも若干詳しい情報が載せられており、それによれば、尾崎は「日清戦役に従軍 戦死 行年二十四才」、寺尾は「日清戦役の際松山連隊に入隊 初年兵教育中黄痘の為病死 行年二十三才」、箭崎は「日清戦役において戦死 行年二十四才」とそれぞれ記されている。寺尾が靖国神社に祀られていない理由は教育中に死去したことだと考えられるが、他の二人の理由は分からない。

- (54) ここに挙げた者の他に、夜須町史編集委員会編『夜須町史 下巻』（同町教育委員会、一九八七年）に掲載されている「夜須町戦没者名簿」には、一八九四年八月二四日に盤竜山で戦死したという寺川福五郎の名が記されている（一五七頁）。これは、日清戦争ではなく、日露戦争の戦没者のようである（『靖国神社忠魂史 第二巻』（一九三四年）三九四頁を参照）。「一八九四」は「一九〇四」の誤りであろう。

- (55) 吾北村編『吾北村史』(同村、一九七七年)、七八〇頁。
- (56) 中村市史編纂室編『中村市史』(同市、一九六九年)、八九四頁。
- (57) 大正町誌編纂委員会編『大正町誌』(同会、一九七〇年)、七〇八頁。また、高知県幡多郡大正町勲功録刊行委員編著『勲功録』(同会、一九六八年)にも室津に関する詳しい記述がある(一四〇頁)。
- (58) 大豊町史編纂委員会編『大豊町史 近代現代編』(同町教育委員会、一九八七年)、一〇五一頁。
- (59) 同前。
- (60) 前掲『吾北村史』、七八〇頁。典拠には「二等兵」とあるが、明らかな誤りなので本文のように記した。以下、他の自治体史に關しても同様に処理する。
- (61) 英霊の面影編集委員会編『英霊の面影』(多ノ郷遺族会、一九八〇年)。同書には頁が打たれていない。
- (62) 鏡野小学校創立六十年記念会編『山田文化小史』(同会、一九三四年)、二二二頁。
- (63) 香我美町史編纂委員会編『香我美町史 下巻』(同町、一九九三年)、一七八頁。
- (64) 三原村史編纂委員会編『三原村史』(同村教育委員会、一九七一年)、五七二頁。
- (65) 大月町史編纂委員会編『大月町史』(同町、一九九五年)、四四〇頁。中田八束『大内町史』(大内町史編纂委員会、一九五七年)、四二九頁にも同様の記載がある。
- (66) 『新池川町誌』(同町、二〇〇二年)、七五二頁。
- (67) 鏡村史編纂委員会編『鏡村史』(同村教育委員会、一九八九)、一一二二頁。
- (68) 宿毛市史編纂委員会編『宿毛市史』(同市教育委員会、一九七七年)、九三九頁。本文に記したように、出身村と氏名以外不明ではあるが、「宿毛市戦没者名簿より」と公文書に拠っていることが明記されている。
- (69) 南国市史編纂委員会編『南国市史 下巻』(同市、一九八二年)、六四二頁。
- (70) 越知町史編纂委員会編『越知町史』(同町、一九八四年)、九九九頁。
- (71) 同前、一〇〇〇頁。
- (72) 前掲『高知市史』、三〇三・三〇四頁。
- (73) 詳しくは、拙稿「高知市による戦死者慰霊——忠霊塔の建設(一九四一年)を中心に——」(『海南史学』四四号、二〇〇六年)を参照のこと。
- (74) 二〇一三年五月二五日確認。
- (75) この数には、前述した岡本金太郎と同様に『高知市出身 忠霊塔英霊名簿』にその名はあるが、日清戦争時の居住市町村を特定できない六名を含んでいる。
- (76) 前掲拙稿「戦争と四国霊場・遍路」、三八頁。

(77) 二〇一二年一月一四日確認。

(78) 二〇一三年七月五日確認。前掲『大豊町史 近代現代編』には、「天坪地区戦没者名簿」(二〇七五頁)が掲載されているが、そこに日清戦争戦没者の名はなく、池田の名もない。

(79) 二〇一二年五月一八日確認。

(80) 二〇一三年五月二五日確認。どちらの氏名の表記が正しいのかは不明である。

(81) 拙稿「高知県高岡郡北原村における戦没者慰霊——忠魂墓地の設置から忠霊塔の建設まで」(『海南史学』第四八号、二〇一〇年)、三三頁参照。

(82) 該当するのは一三人(二三件)の葬儀である。

(83) 「征清病死兵の埋葬式」(『土』一八九四年九月二二日)。

(84) 安芸村は安芸市の一部。

(85) 「陣亡兵葬儀」(『土』一八九五年一月二八日)。

(86) 「三宅東野両病死兵の葬儀」(『土』一八九五年二月八日)。

(87) 野根村は東洋町の一部。

(88) 「横山一等卒の葬儀」(『土』一八九五年八月三一日)。

(89) 横山は「五師後歩一九大三中」(『忠』九五五頁)、つまり第五師団後備歩兵一九大隊三中隊の所属であった。

(90) 「埋葬式準備」(『土』一八九五年四月二〇日)。  
尚、新聞報道、前掲『須崎市史』(九二七頁)、(後述する)南部の墓、全て「寅治」の表記であるが、『靖』のみが「寅次」であ

る。ここでは、墓等に従った。

(91) 『土』一八九五年四月一八日。

(92) 『土』一八九五年一〇月一九日。

(93) 『土』一八九五年二月五日。

(94) 『土』一八九五年二月六日。

(95) 曉霞村は香美市の一部。

(96) 「故杉村伝治氏の葬儀」(『土』一八九五年一〇月二四日)。

(97) 『土』一八九五年四月一八日付紙面の葬儀広告。

(98) 『土』一八九五年二月五日付紙面の葬儀広告。

(99) 「遺骨埋葬式」(『土』一八九六年一月一九日)。

尚、前掲「東川村政概要」では有沢の葬儀会場を「奈比賀字小河積」としている。

(100) 「故原二等卒の葬儀」(『土』一八九五年一月一日)。

(101) 前註に同じ。

(102) 「故一等軍曹大内南洋氏」(『土』一八九五年四月二四日)。

(103) 拙稿「高知朝倉陸軍墓地について——日露戦争期の動向を中心に——」(高知大学人文学部人間文化学科『人文科学研究』一四号、二〇〇七年)を参照のこと。

(104) 二〇一一年二月一五日確認。

(105) 二〇一二年四月一〇日確認。

(106) 二〇一一年一月二九日確認。

(107) 二〇一二年五月九日確認。後述するように墓には「久五」と刻

まれている。『靖一』をはじめ、他の史料の表記はすべて「久吾」である。

(108) 『土』一八九五年一月二二日。戸波村は土佐市の一部。

(109) 文末に「明治三十年十月」とある。この月に建てられたものであろう。

(110) 二〇一二年五月九日確認。

(111) 二〇一二年二月一七日確認。

(112) 前掲拙稿「高知県大月町における戦没者慰霊の歴史」。

(113) 二〇一二年四月二五日確認。尚、写真は筆者が雑草を除去した後のものであり、当初は墓石がほとんど見えない状態であった。

(114) 大野見村史編纂委員会編、同委員会発行。同書二七二頁に、高橋・大西が朝鮮国仁川兵站病院で「戦病死」と記されている。

(115) 同書、二七〇頁。また、両「記念碑」が移転されたのは一九五五年であったという(二七一頁)。墓の確認時、二つの記念碑も存した。

(116) 前掲『北川村史 通史編』には「尾崎且爾の墓」「寺尾菊次の墓」の写真が掲載され、「工兵二等軍曹野村の墓碑」について言及されている(三名の名は既出、五二八頁)。これらの墓は未確認である。

(117) 二〇一二年二月一七日確認。

(118) 「日清戦役に於て当墓地に埋葬された英霊の御遺族調査の件依頼 昭和五十三年七月十二日 比治山陸軍墓地保存協賛会々長 中

野潭」(山口茂昭編『比治山陸軍墓地略誌(第五版)』(広島比治山

陸軍墓地奉賛会事務局、一九九八年)、一六二頁。

(119) 井上勝生『明治日本の植民地支配 北海道から朝鮮へ』(岩波全書、二〇一三年)、一〇七頁。

(120) 井上勝生「日本軍最初のジェノサイド作戦」(中塚明・井上・朴孟洙『東学農民戦争と日本 もう一つの日清戦争』(高文研、二〇一三年)所収)、八三頁。

(121) 井上勝生氏は、石黒の墓の碑文を用いて日本軍「東学党討伐隊」の進軍路の検証を行なっている。同氏「東学農民戦争、抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探索して——韓国中央山岳地帯を中心に——」(『人文学報』一一一号、二〇一八年)、二九・四三〜四五頁を参照。



2018年7月1日発行

編集兼 高知大学人文社会科学部  
発行者 人文社会科学科  
人文科学コース

高知市曙町2-5-1

印刷所 (有) 西村 謄 写 堂

高知市上町1丁目6-4

The Sino-Japanese War and Kochi Prefecture:  
Mainly Focusing on the Commemoration of the War Dead

OBATA, Hisashi

*Offprint from*

Research Reports of  
Humanities, Faculty of  
Humanities and Social Sciences,  
Kochi University  
KOCHI, JAPAN  
2018